

柳本 通義について

西羽 晃

前回に書いた館潔彦の義弟が柳本通義で、両家の墓は照源寺墓地の一角に並んで建っている。柳本通義は安政4（1857）年に南寺町で生まれた。桑名藩士の家系であるが、下級武士であった。明治5（1872）年に姉婿の館潔彦を頼って上京し、その年に横浜のブラウン塾に入り、旧桑名藩主の松平定教らとともに英語を学んだ。8年に定教がアメリカへ留学したので、ブラウン塾は廃止となったため、東京英語学校へ移った。しかし下級武士の出身であったので、生活費も学資も乏しい状態であった。

政府は北海道開発の人材養成のために札幌農学校（現北海道大学）を開くことになり、9年に第1期生を募集したので彼は受験して、合格した24人のうちの1人となった。札幌農学校は全寮制であり、授業料は無料で衣食住は勿論、小遣までも支給された。洋服洋食の生活であった。教師は外国人で授業はすべて英語であったが、唯一の例外は演武（武術）のみが日本人教師で、日本語の授業であった。授業は午前中で、午後は農作業であり、作業には手当も支給された。

有名なクラーク博士は最初の1年間のみで去ったので、直接に薫陶を受けたのは柳本を含む第1期生のみであった。13年に彼を含めて13人だけが卒業し、彼らは日本最初の農学士の称号を与えられた。札幌農学校生は授業料は無料で衣食住を支給されていたので、5年間は北海道で勤務する義務があり、柳本は七重勸業試験場勤務となった。その後は道内各地で勤務し、29年には日本の植民地だった台湾総督府の拓殖課長となり、台北へ赴任した。家族は京都に住み、彼は単身赴任だった。

40年に台湾総督府を辞任して、家族の居る京都に住み、大正元（1912）年に兵庫県の山田川工事技師となり、3年には山田川臨時工事事務所長となったが、工事終了後の4年には辞任した。病身だった妻の「なを子」が8年1月に死亡したので、照源寺に葬った。9年に彼も桑名へ帰り、後妻の「ます」と結婚している。長男の通雄は京都帝国大学在学中に病気となり、休学して長らく療養していたが、12年1月に死去した。照源寺に独立した墓が建てられた。

通義は桑名に帰郷して以来、桑名のために尽くした。大正13年に鎮国守国神社に釣り灯籠1対を寄進している。14年に桑名町会議員となり1期のみ勤めて

いる。昭和5（1930）年に照源寺檀家総代として書院改築にあたり、8年には楽翁公没後百年祭記念大祭協賛会残務委員長として楽翁公百年祭記念宝物館を起工し、翌年に竣工させている。8年には桑名町長にと推す声もあり、新聞では「最も有力」と報道されたが、実現しなかった。

12年10月17日、桑名市西鍋屋町の自宅で逝去し、先妻の眠る照源寺墓地に合葬された。享年81歳であった。



照源寺にある柳本家の墓

参考資料

「台湾総督府技師柳本通義依願免本官ノ件」ほか（国立公文書館所蔵資料）

『柳本通義の生涯』（神埜努著 共同文化社発行 1995年）

『朝日新聞』三重版（1933年6月4日）